世界の鎖

レイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の鎖

【Ｎコード】

Ｎ８１１６Ｚ

【作者名】

レイン

【あらすじ】

ある日、突然異世界に召喚された専門学生、冴木漣はどこにでもいる極普通の二十歳の女性だった。異世界の王国ナイトレインで国王の花嫁になれといわれ戸惑うが、元の世界に未練の薄い彼女はある条件と交換に”花嫁候補”となる事を承諾する。

詳細

舞台

・魔法と遺失技術（ロストテクノロジー）が発達した異世界ユーリア。古代遺跡より発掘された遺失技術は太古の技術であり。遺失技術に魔法を付与することにより、オーバーテクノロジーを使用している。

ユーフェリア詳細

・魔法文明の発達した世界であり、生活レベルとしては中世ヨーロッパ並みだが、魔法を駆使する事により現代世界よりもある意味便利である。

・魔法には属性が存在し人々は主に火、水、風、地に属し極稀に至宝属性と呼ばれる、薄暮の属性と暁の属性を持つものが存在するが、現段階で薄暮の属性を有する者は確認されていない。

・およそ十歳前後で有する属性により髪色が変化し、生涯を置いてその髪色で過ごす。力の強い者より濃い色を有している。

ｅｘ、火の属性者　赤・カーマイン等→桜色・サーモン等

水の属性者　青やシアン等→白藍色・ベビーブルー等

風の属性者　緑やボルト等→秘色・シャルトルーズ等

地の属性者　茶やチョコレート等→小麦色・ベージュ等

登場人物

・冴木　漣（２０）

ある日突然、召喚により異世界に連れてこられた専門学生。パティシエの卵であり趣味と実益を兼ねた職に就きたいと考えていた。異世界で薄暮の女神、国王の花嫁、と呼ばれ困惑する。

・アベル・ナイトレイン（２５）

異世界ユーフェリアに存在する王国ナイトレインの若き国王。王位に就いて僅か一年で腐敗した貴族社会を粛清し、正常化した賢王。

銀色の髪と冬の湖のような瞳をした麗人。暁の属性と水の属性を有している。

・クライブ・ブランドナー（２８）

ナイトレイン王国の国王付き近衛隊隊長。アベルとは幼馴染の関係でもあり身分を超えた友人の関係を築いている。マローネ色の髪と鳶色の瞳をした地属性の青年。

・ランスロット・ディケンズ（３５）

ナイトレイン王国王宮魔法師長。ユーフェリアの至宝と呼ばれる世界最高峰の魔法師でありアベル至上主義者。漣を召喚した張本人であり、申し訳ない気持ちをもってはいるものの、アベル至上主義であるが故に見ないふりをしている。濃いシアン色の髪と瞳をした中世的な美貌の持ち主。

・ヒューバート・デニス（６８）

王宮に勤める使用人を一手に纏める侍従頭。元は王家の専属家令だったがその腕を買われ使用人たちの長となる。私生活では愛妻家であり６人の息子を持つ家庭人。アベルを主人であると同時に息子のように思っており常にアベルに付き従う。妻は侍女頭アンナ。アイヴィーグリーンの髪と瞳をした風属性者。

・アンナ・デニス（６２）

侍従頭ヒューバートの妻であり６人の子供の母の経験を買われたアベルの元乳母。一度は老齢を理由に乳母を引退した物の、人柄と能力を買われ侍女頭として復帰。温和で常に笑顔を絶やさない人物だが怒らせるとランスロットですらたじたじとなる。

・アリス・リデル（１５）

成人を迎えたばかりの侍女見習い。明るくおしゃべりで空想好きな少女で侍女たちのムードメーカー、好奇心が強く何かとドジな面もあるが異世界からやって来たヒロインに憧れており、３侍女の中では最も忠誠心が強い。調味料などを専門に扱う商家。桜色の髪と瞳からわかるように、魔力はさほど強くない。

・エイミー・コレット（１９）

ディケンズ家の分家筋にあたるコレット子爵家の三女。物静かで思量深く物知りな女性。多くを語る事はしないものの、必要な時にはちゃんと助言をする。王宮魔術師と親戚筋でありながら魔力が弱い事にコンプレックスを持っているため、それを補おうと勉学にはげんでいる節がある。白藍色の髪と瞳をしている。

・シンシア・ラドリー（２３）

３侍女の中では最年長となる侍女。ともすれば天然と取られがちなほどおっとりとした女性で、庶民の出であるにも拘わらず貴族の子女が好む音楽や刺繍、お茶に精通している。男嫌いな節があり、侍女の仕事も普段は女性しかいないということから選んだ。老人や子供、気を許した男性以外には普段からかんがえられぬほど辛辣になる。ベージュ色の髪と瞳をした長身の女性。実家は貿易を営む商家。

詳細（後書き）

登場人物とかの紹介ですが、あくまで作者の覚書です。

プロローグ

その日はただ、ふと思いついて帰宅ついでに都内でも大型店で知られる書店へと足を運んだだけ。２ヶ月後に開催される製菓コンテストに出品するスイーツの参考資料を探すためだ。

三連休の初日だからか、たくさんの人たちが街にあふれていたけれど、書店の中というのは基本的に静かだった。音といえば遠慮がちに流されたＢＧＭ、誰かが歩く足音、本を捲る時の微かな紙ずれの音……。

大きめのバッグを肩にかけ直しながら、私は料理本のある辺りをうろついていた。

（えっと……あぁ、これがいいかなぁ）

目当ての本が見つかり、そのほかにも数冊本を購入して書店を出ようとしたその時、一瞬周りの景色が歪んで見えた。

「……あれ？」

ここのところ実習続きで疲れているのだろうと、一度目をこすり再度視界を上げたその時には辺りの景色は一変していた。。それまで、膨大な量の書籍が並んでいた棚はなくなり、先ほどまで並んでいたレジカウンターも見当たらない。その代り、そこにあったのはやたら大きなベッドと高そうなソファーやテーブル。そして降り注ぐ陽光をこれでもか、と取り入れた大きな窓。

（は？え？なに、これ……え？）

人間、驚きすぎると言葉が出ないとは聞いていたが、まさにその通りだったとは。

腕に抱えた紙袋と肩にかけた大きいバッグ以外何も持っていない私が、世界を放り出された瞬間の事だった。

しばらく茫然とその場に立ち尽くしていた私が我に返ったのは、この部屋の出入り口らしい重そうな扉がばたんっ、と音を立てて開いたからだ。

扉が開く音がしてから、まったく物音のしないそちらを恐る恐る振り返る。と、そこに立っていたのは私よりも長く伸びた髪をまっすぐに下した美女だった。

『あ、あ、あ、あ、』

こちらを指差しながら、わなわなと唇を震わせるその人に一瞬だけ”人に指差しちゃいけないって習わなかった？”と問いただしたい気分になったものの、はたと重い止まる。

もしかしたら、この人が何か知っているかも知れないとおもったからだ。

「……あの、もしかしてこのお部屋の方ですか？」

できるだけ穏やかに、できれば微笑を添えて。お世話になった孤児院の院長先生が人に物を尋ねる時はそうしなさいって言っていたっけ。懐かしい顔を思い浮かべつつ、目の前の美女の返答を待つこと数秒。美女は二重のくっきりとした瞳にいっぱいの涙をためて叫んだ。

『へ、陛下！！！！花嫁様がーーーーー！！！！』

（花嫁様？）

聞こえたきた不審な単語に、背中がぞわりとしたのは一瞬の事だった。

召喚と花嫁候補

「はぁ……じゃあ早い話、私って間違えて召喚されたって事ですよね？」

『……まぁ、そうとも言う』

突然周りの景色が一変してから2時間。私は目の前に出されたお茶とお菓子らしき物に手を付けるのを早々に諦めて彼の話に耳を傾けていた。

優美な曲線を描くアンティークっぽいソファの向かいに座る彼の名は、アベル・ナイトレイン。月の光を集めたような銀髪と、冬の湖を模したような瞳をした美しいと言う言葉では足りない程に美しい青年はこの国の若き国王だ。

そう、国王。驚いた事にここは地球でもなければ日本でもなく、ユーリアと呼ばれる世界の神聖ナイトレイン王国の王城の一室だった。最初、説明された時は彼らの頭は大丈夫だろうか？と心配にはなったものの、目の前で実際に”魔法”なるものを見せられた日には信用するしかない。

そして、何を隠そうこの部屋の隣室（国王の寝室）で私が最初に出会ったシアン色の髪の美女こそ、私を日本の首都、東京から召喚した張本人で……。

「それで、私はどうすればいいんですか？」
『どうすれば、とは？』

「いや、だって間違いなんですよね？本当ならちゃんと召喚する人決まってたわけですし、だったら私はここに居る必要ないでしょうし……」
『……つまり、元の世界に帰りたいということか？』

「いや、別に……」
『『は？』』

私の言葉に、目の前の二人の言葉が重なる。まぁ、気持ちは分からないでもない。テンプレ通りに動くなら、ここは勝手な理由で召喚された事に憤り、元の世界に帰せ戻せと泣き喚く場面だ。だがしかし、生まれて間もない頃、孤児院の前に捨てられた私には家族もいなければ、親友と呼べる友人もいない。もちろん、そんな身の上話をする気はさらさらないけれど。

「や、だって話を聞く限り召喚って魔力を使うんでしょ？それに今まで元の世界に帰った人いないんじゃちゃんと帰れるか分からないし……だったらちゃんと言葉も通じてるしここで生きてもいいかなって……あ、でもこっちの世界の常識とか知らないし、その辺りちょっと教えてもらえますか？」

一気にまくしたてるように話した私に、唖然としていた二人。が、ほんの僅かな時間の後、国王様が突然笑い始める。

『……あはははは！！うむ、気に入った！！その方、確かレンと申したな？』

「はぁ……」

『レン、余はそなたの事が気に入った。王妃になりたくないのならなる必要はない。が、そなたがこの世界で生きていくのに必要な知識や力は余が保証しよう。慣れるまではこの王宮で過ごすがいい』

「へ？あ、どうもありがとうございます、国王様」

『アベルだ。私の事はアベルと呼んでくれ』

「アベル？」

『そうだ』

綺麗な顔で綺麗に微笑んだアベルが立ち上がる。

その仕草や表情にちょっと見惚れていたのは内緒だ。

『ランスロット、アンナに彼女の部屋を用意するように伝えよ。あぁ、それからクライブとヒューバートを呼んでこれからの事を……部屋は菫青石の間がいい』

『御意。では、私はこれにて……』

アベルに命じられた美女が音もなく部屋から消えたのは、右の手首にはめた時計が午後2時を少し回った頃だった。

その後現れた、小柄だがふくよかな体系をした優しそうな女性に聞いた、アベルが賢王と国民に慕われている事実に感心したのはまた別の話だ。

新しい日常

「おはようございます、レン様。今日はとてもよいお天気ですわ」
「おはよう、アリス。そうね、最近寒かったから特に暖かく感じるわ」

この世界に来て早、一週間。私は自分でも驚くほど早く今の生活に馴染んでいた。朝の身支度を手伝われる事も、常に周りに誰かしら人がいて必要のない世話をしてもらう事も。

現在、私には3人の侍女と時々様子を見に来る侍女頭のアンナ――最初に私をこの部屋まで案内してくれたザ・お母さんと言った感じの女性を含めた4人がついてくれている。侍女を付けるとシアン色の美女――実は美女ではなく美男だったのだけどに言われた時、自分の面倒ぐらい自分で見れるからと丁寧にお断りしたところ、私の立場は王の客人ということになっており、自国の王の客人に侍女の一人もつけられないとなれば国の対面にも拘わると、ありがたくない説得をされた。

仕方なくつけてもらった侍女は4人（実質3人）と多いなと思ったが、これでもかなり少ない方らしい。本来、王の客ともなれば最低でも10人ほどの侍女がついても可笑しくないらしいが、常に周りに人がいる生活では心が安らがないだろうというアベルの判断らしい。

「レン様、もう間もなく陛下がお見えになりますわ。そろそろお召し替えを」
「ありがとう、シンシア」

「本日はこちらのご衣裳などいかがでしょう？」

そう言って、シンシアが持ってきたのは青地のドレスの裾にクリーム色の小花が散らされた、まぁちょっとかしこまったワンピースとも言えなく無いドレスだ。

「えぇ、それで結構です」
「かしこまりました」

促され、大きな鏡が付いた化粧台の前に座ると、慣れた手つきでアリスが私の髪を結いあげてゆく。ややあって、出来上がったのは長い黒髪をサイドアップにしドレスよりも少し濃い青色の髪飾りをあしらった髪形だ。

その後、やはり慣れた手つきでシンシアに薄い化粧を施してもらい、着替えが終われば朝の身支度の完了だ。

もともと化粧をする機会などほとんどなかった私は、毎朝必ず施

される化粧に戸惑いはしたものの、この1週間で随分慣れたと思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8116z/

世界の鎖

2012年1月6日07時47分発行